

し、現在まで19例を経験し、良好な成績を得ている。現時点での我々の施設における適応、手技、成績を報告する。

33. 総胆管 hyperplastic polyp の1例

(筑波胃腸病院)

日高 真・大橋 正樹・鈴木 修司

総胆管の良性腫瘍は稀であり、現在まで本邦では、37例の報告しかない。内、hyperplasiaは12例である。今回、polyp状を呈したhyperplasiaの1例を経験したので報告する。

症例は64歳の女性。5年ほど前から、右季肋部痛、背部痛が出現、他院にて異常ないといわれてきた。血液生化学データでは、軽度の糖尿病とエラスターゼIの軽度上昇が認められるのみで、他には異常はなかった。ERCPにて、下部胆管に、逆U字型の陰影欠損を認めたため、下部胆管の腫瘍と診断し、全胃幽門輪温存膵頭十二指腸切除術を施行した。現在、症状も消失し、経過は良好である。

原因不明の右季肋部痛背部痛には胆管の直接造影検査が必要と考えられる。また、胆管腫瘍は悪性が否定できないかぎり、膵頭十二指腸切除が望ましいと考えられる。

34. 特異な画像所見を呈した黄色肉芽腫性胆嚢炎の1切除例

(社会保険山梨病院外科、*同病理)

木暮 道夫・植竹 正紀・飯室 勇二・
草野 佐・小澤 俊総・矢川 彰治・
野方 尚・小俣 好作*

黄色肉芽腫性胆嚢炎 xanthogranulomatous cholecystitis (以下XGCと略)は、胆嚢炎の一形態だが、腫瘍を形成すると胆嚢癌との鑑別が困難であるとされている。我々は、肝被膜下に広範な液体貯留をきたし、興味深い画像診断を呈したXGCを経験した。

症例は61歳の女性。右季肋部痛を主訴に当科を受診した。血液データは炎症反応のみであった。USでは胆嚢壁の肥厚と胆嚢内隆起性病変の他に、肝後下区域足側および右横隔膜下にfluid collectionを認めた。CT、MRIにて、肝周囲の液体は、肝被膜下に存在した。Angioでは、炎症所見のみで積極的な悪性所見はなかった。術中所見、病理診断にてXGCと診断された。

35. 診断が困難であった膵尾部癌の1例

(くず葉台病院)

本橋 洋一・小野 邦良・高橋 元治

症例は、70歳、男性。1992年7月末、心窩部膨満感

出現。8月中旬、当院を初受診する。血液生化学検査、腹部超音波検査、上部消化管造影、上部消化管内視鏡検査を受け、滑脱型食道裂孔ヘルニアの診断にて加療。しかし症状軽快せず、9月中旬、精査目的にて入院となる。各種検査後、CA19-9が3,300と著明な上昇、腹部CT検査により切除不能な進行膵尾部癌と診断。今回、診断が遅れた原因として、外来にて、腫瘍マーカーの不測定、上部消化管造影・内視鏡での胃体上部後壁の壁外性圧排所見の見逃し、腹部超音波にて膵尾部の描出ができなかったことがあげられる。腹部不定愁訴で来院する外来患者に、膵癌の可能性も考慮してスクリーニングをすすめるべきと思われた。

36. 急性発症自己免疫性肝炎の1例

(東女医大成人医学センター、

青山病院消化器内科)

日野 生子・栗原 毅・安達由美子・
西川 和子・日野 成子・山形美帆子・
秋本真寿美・黒川 香・石黒 久貴・
新見 晶子・高田茂登子・前田 淳・
重本 六男・山下 克子・横山 泉

52歳、女性。1984年3月より年2回成人医学センターにて、健診を受けており、1992年3月まで肝機能異常は、指摘されていない。同年8月より全身倦怠感、手指関節痛が出現、外来で急性肝炎様の肝機能障害を指摘され入院となった。肝機能障害、高ガンマグロブリン血症、抗核抗体陽性、肝炎ウイルス関連抗原陰性、肝生検で急性肝炎様の像を示し自己免疫性肝炎と診断し、プレドニン投与、トランスアミナーゼは正常化した。本症例は発症前の検査値が把握されており、発症の進展機序を考える上で示唆に富む症例と考えられるので報告する。

37. 胆汁うっ滞型肝障害にプラバスタチンナトリウムが著効したと考えられる1例

(至誠会第二病院消化器内科、

*東女医大成人医学センター)

根本 行仁・池田みどり・鈴木 義之・
足立ヒトミ・黒川きみえ・栗原 毅*

症例は72歳女性。1991年10月頃より黄疸、皮膚癢痒感出現し近医入院精査するも原因不明、1992年2月当科入院となった。入院時T-bil 18.6、GOT 139、GPT 74、T-chol 922、ウイルスマーカー陰性、自己抗体陰性で、画像上閉塞性黄疸や胆道系の炎症は認めなかった。T-chol著明に上昇するためプラバスタチン10mg/dayの投与を開始したところ、黄疸、肝機能改善し、組